

日本社会事業大学・同大学院 入学式 激励のことば

第61期生として日本社会事業大学に入学する新入生の皆さま、ならびに平成29年度生として大学院に入学する大学院生の皆さまに、ご入学を心よりお慶び申し上げます。ご家族の皆様も、ご子息、ご息女の希望に満ちた姿に、さぞご安堵のことと、重ねてお慶び申し上げます。

超高齢社会を迎えたわが国では、医療、保健、福祉の各分野への国民の期待が日々高まり、そのニーズも多様なものとなっています。社会福祉を取り巻く環境も大きく変貌しつつあります。このような社会の変化、多様なニーズに対応するべく「社会福祉実践のフロントランナー」として、この日本社会事業大学での学びを礎とした全国16,000人の同窓生が、今この時も、各地で、共感の思いの中で様々な人と向き合いながらご活躍されています。新入生の皆さん。ようこそ私の母校、日本社会事業大学へ。皆さんも今日から私たちの仲間です。心から歓迎申し上げます。

昔話になりますが、原宿学舎、学生寮、おんぼろ学生会館で過ごした私の大学生活は、最も自分を大きく成長させてくれた学びの時でした。全国から集まる一学年100名という少人数で、上級生・下級生の垣根もなく、顔の見える仲間との4年間、そこでの様々な価値観との出会いは、自分を大きく変え、卒業後35年間の社会福祉実践を支える力はここで獲得してきたものだと思っています。また、今から考えるとあの著名な大先生方が、その当時、自分の名前を憶え呼んでくれていたんだとビックリするくらい近い教職員の皆さんとの距離。これは他の大学では得難い本大学の大きな利点です。皆さんこの誇るべき日本社会事業大学で大いに楽しみ、大いに学んでください。私たちも心より応援していきたいと思っています。

教育後援会は保護者の皆様の自主的な会費や寄付金によって運営されています。大学祭やサークル活動への援助、ボランティア活動や海外交流事業への支援、専門書に偏らない幅広い図書購入への援助、また、「社会福祉士資格取得に向けて」全学生へ「模擬試験受験料の援助」などを行っています。皆さんの力を合わせて学生諸君を応援していきたいと思えます。保護者の皆様におかれましては、教育後援会へご協力賜りますよう、この場を借りてお願い申し上げます。

さて、学生の皆さん、社会での学びには大きく三つの欠かせないものがあるといわれます。一つは実践するための「技術」です。スキルは一生学び続けていく必要があります。常に新しいものが生まれます。私が今かかわっている高齢者介護の分野でも、一昔前までは介護は人の手でするものという理念が強く、介護者の腰痛や介護される側にも緊張からの拘縮変形を生んでいました。これまでのマニュアルハンドリングに加え、これからは、抱えない介護ノーリフトポリシー、福祉用具を活用した人にやさしい介護がどんどん実践されるようになってきています。新しいスキルを学んでください。

二つ目は「知識」です。その実践は何に裏付けられたものであるのか、知識を理解しておく必要があります。私が35年前、卒業直後に勤めた現場では、精神薄弱児の治療教育、応用行動分析に基づく問題行動の変容が臨床課題でした。今は発達障害児の発達支援という言葉となりました。自閉症スペクトラムの概念から行動特性の理解と配慮が当たり前となり、治療から支援する対象となっています。障害モデルも医学個人モデルからICF環境との相互作用、活動や参加のレベルで障害をとらえるようになりました。

そしてもう一つが「意思」です。「価値」と言っても良いでしょう。実践しようとする自分を動かす心です。この「心みがき」のありよ

うが実践を最も左右してしまうのかもしれませんが。某テレビ局の番組は、「頑張っている障害者がいます。私たちは応援しましょう。」と伝えます。はたしてそうなのでしょうか。障害を持つことががんばらなくてはいけない存在になるのでしょうか。私も若い時、ダウン症の方や車いすの方たちとのサヨナラの時、ついつい「じゃあ頑張ってるね。」と言葉をかけていたように記憶します。「またね」「気をつけて」「お疲れさま」等と、誰しもにかけられる言葉であったか自省しています。自分の実践がひとりよがりの自己犠牲とならないように、磨かれた自分からあふれ出す思いで、シャンパンタワーのグラスが次々と満たされていくように、熱い思いを常に磨き、あふれさせていってほしいと願います。

「技術」と「知識」と「価値」。これらは掛け算でつながります。一つでも「0」だと「0」なんですね。どうぞ皆さん、お一人おひとりが主人公です。主体的に、またこの三つを意識しながら大きく成長されることを期待して、励ましの言葉といたします。

平成29年4月5日

日本社会事業大学 教育後援会
副会長 山本 憲昭